



自由人の軌跡

——新島襄生誕記念講演要旨——

憲法政治学研究会

佐々木惣一先生及び

中島重先生と同志社

田 畑 忍

一

佐々木先生は京大最初の卒業生で、明治三十七年の任官から昭和八年の滝川事件で退任されるまで京大であり、その傍ら若干年の間同志社大学の講師（行政学）をされていた。

また戦後しばらくであったが、大学院の客員教授になっていただいたことがある。それから助教授の時代には同志社構内の新北小路町の長屋の一軒に居住されていたことがあったと聞いている。従って彰栄館の鐘の音を毎朝毎晩耳にされていた先生が、同志社に対する愛着の気持を特に抱かれるようになったのは、自然であったと言える。また、佐々木先生の信仰は禅宗であったが、信教自由の精神の故にキリスト教をも尊重されていた。殊に同志社と関係の深いキリスト者・吉野作造博士（東大教授）を敬愛されていた。湯浅八

郎総長の顧問を引き受けられたこともあった。昨年三月米寿を迎えられた先生が、逝去されたのは八月四日のことである。

中島先生は東大を出られた（大正五年）翌年に、同志社大学法学部に赴任されて昭和四年まで在職され、その後関西学院大学に行かれ、戦後（昭和二十一年）再び同志社に復帰されたが、同年五月二十九日になすべく多くを残して永眠された。在任中、中島先生の担当された学科目は、憲法・国家論及び法理学であり、またドイツ書の講読と、予科では倫理学を受持たれた。それだけでなく、田原和郎君とともに初期同志社生協の運動に加わり、賀川豊彦先生とともに社会的キリスト教運動の基礎を同志社においてつくられた。中島先生が同志社に残された足跡はまことに大きいと言わねばならない。

中島先生の一番の恩師は佐々木先生の心友の吉野作造博士であるが、このお二人の属する本郷教会の牧師が、のちに同志社総長になった海老名弾正先生（同志社英学校第一回の卒業生）であって、雄弁と名説教の中島先生には小海老名の観があった。

二

私は在学中、佐々木先生から行政法の講義を拝聴する機会を恵まれながら、若気のいたりと解釈法学さらいのために、受講をせず、ただ試験だけを受ける愚を敢てしてしまった。しかし卒業後教授会命令で憲法を専攻するようになって、佐々木先生主宰の公法研究会に列することになり、親しくその教を受け

佐々木惣一博士



るようになった。それは昭和四年のことであり、このようにして私は佐々木憲法学を継承することになった。のみならず私は佐々木先生に人間的にも大いに鍛えられた。中島先生や住谷先生から叱られたことは一度もないが、佐々木先生に叱られたことは数えきれない。私自身のことだけでなく、同志社のわるい点についても幾度も叱られたからである。「同志社は案外同志社的でないね」と、先生はよく仰言った。佐々木先生は校祖・新島先生とその門下の安部磯雄先生及び浮田和民先生を非常に尊敬されていた。しかし、新島先生のあのエピソード（朝礼のときに左手を鞭たれた）については評価をされなかった、

中島重博士



というよりもきびしく批判的であった。私は佐々木先生によって却って同志社精神を教えられるところが実に多くあった。

三

私の学問の基礎を在学中につくって下さったのはしかし中島先生である。もちろん、先生的美濃部達吉博士流の主観的憲法学にはついてゆけなかった。しかし、その法哲学と多元的国家論の講義が、私をして学問に志さしめる動機になったのである。林要先生、住谷悦治先生から唯物史観を教えられたことも学問形成に大きな力になっているが、若しもマツキーバーの共同社会学・テンニース及びフイアーカントの形式社会学などに傾倒されていた中島先生の啓発がなかったならば、多分私は学問などを生涯の仕事に選ぶ決意をしなかったであろう。高木庄太郎先生がまず信仰の実践について私を導いて下さったあとに、中島先生が私の学問的関心を喚起して下さったのである。そうして最後に佐々木先生が、田村徳治先生、恒藤恭先生とともに、私の学問道における客観主義の方向をきめて下さったのである。殊に憲法学について決定的な影響を与えて下さったのが佐々木先生だったと

いうことになる。

佐々木先生、中島先生らにお世話になった同志社人はもちろん私だけではなく、実に数多いのであるから、同志社とこの両先生との関係の考察を同志社の歴史から削りとしてし

徳富蘆花の振幅

昨年の秋、熊本市に全国図書館大会の催しがあり、開会式には図書館活動に関係のある熊本県下の人たち約一千名が参加した。その夜私は、熊本県立図書館長の肝入りで開かれた地元図書館人や文化人と、東京の出版社代表たちとの懇談会に、オブザーバー格で出席し、書物を通じての文化交流のあり方を考える上で得るところがたいへん多かった。中央の出版社は、もっときめ細かく地方文化のために努力してほしいというのが大体の発言内容であったが、その中で、地方としては珍しく長い誌歴をもつ月刊総合雑誌『日本談義』

まうことはできない筈である。それは丁度早稲田大学の歴史から、同志社出身の浮田和民先生・安部磯雄先生らを没却し得ないのとはとんと同様だと言えよう。

（法学部教授・政治学）

寿岳文章

の編集者（だったと記憶する）の、蘆花生誕百年を記念して完全な蘆花全集を出してほしいとの切望には、私もとりわけ心を打たれた者の一人である。

註 昭和三年から五年にかけて新潮社から刊行された全集二十巻は、最後の一卷を書簡集としていたが、日記は収録されていず、正しい意味での全集とは言いがたい。しかし沖野岩三郎・徳富愛子の解説は貴重。

熊本県人には、郷土の偉人として蘇峰兄弟に対する特別の愛着もあろう。しかし、蘇峰全集でなく蘆花全集をもとめる心底には、この兄弟の出身地である肥後一国の精神的風土

を超越して、明治から現在につながる日本知識人全体の感覚が秘められているように思われる。そしてそれは、蘆花の思想の振幅が、兄・蘇峰と比較にならぬほど広がったこととつながるであろう。

振幅の説明を辞書に求めると、「物体が静止の位置から振動を起してその右または左の極点に至る距離」（『広辞苑』）とある。具体的には、時計の振子の動きを想像していただければよろしい。蘆花の場合、対立する思想のふりはばは、常に左右の極点に至るおもむきがあった。誰でも青年時代には多かれ少なかれこの傾向をもつものであり、兄・蘇峰にもそれが見られるけれども、彼は早くから国家権力の前に自己を定着させ、右へ右へと片寄るばかりであった。しかし弟・蘆花は、死の直前まで、激しい振幅の弧をえがき続けた。日記の最後には、「耶蘇教ベケ」と書かれていたと言うが、兄に比してこの弟の方が本物の基督者であったことを誰も疑わぬ。真理は汝を自由にすると言うが、生涯真実を求めて烈しい動機の旅程を積み重ねた蘆花に、私は明治・大正期の最も輝かしい自由人の面影を見る。その面影に、いま幾つかの照明を

与えたい。

蘆花は、明治元年熊本県葦北郡水俣町に生まれ、昭和二年、思い出の深い伊香保温泉で死んだ。享年六十歳。父の一敬は横井小楠門下の俊英、母の久子は矢島家の出で、その姉妹には、小楠の妻つせ子、熊本女学校の竹崎順子、矯風会の矢島楯子などの傑物が多い。

この父と母との間に生まれた七人兄弟姉妹の末子が蘆花・健次郎である。元・同志社総長湯浅八郎博士や、矯風会の事業を継承した久布白落実女史の母堂が、それぞれ蘆花の姉であることはよく知られている。

蘆花は、のちに「日は東より出で救は日本より出づ」と言い、日本人であることに特別

徳富 蘆花



の使命感をよみとっているが、これは彼が明治元年に生まれ、九年の神風連の乱、十年の西南戦争を体験し、爾来日清・日露の両役から明治天皇の死に至るまで、つぶさに明治と運命を共にしたことと無関係ではない。またその意味では、一年年長の夏目漱石が『心』に投影した心事と相通うものがあろう。

明治十一年、蘆花は兄に伴われて同志社に入学、初めて内外の文学と接する。十三年退学して帰郷、熊本共立学舎に学び、十八歳の時、同地のメソジスト教会で受洗、伊予の今治で伝道に従事したが、十九歳、再び同志社に入学した。この前後から蘆花の号を用いる。山本覚馬の娘、すなわち新島襄先生の義姪山本久栄との不幸な恋愛は、大正二年出版の『黒い眼と茶色の目』に詳しい。自覚的には、蘆花の生涯を通じてのあのはげしい振幅は、新島先生の「黒い眼」と山本久栄の「茶色の目」を両極とする同志社在学時代に始まる。同志社在学が、蘆花の一生で重視されねばならない理由はここにある。

大正六年の『死の蔭に』があらわす生命の否定、翌七年の『新春』が語る生命の肯定、これは結局霊と肉の相克ともつながるが、私

は蘆花に見るすべての振幅の軌跡を、「人間の善への信頼、自然界の法則の厳存への謙虚な認識、理性と相互扶助」によって人間は救われるとするサー・ハーバート・リードのアナーキズムに求めたい。日本の思想家たちの系列において、アナーキズムはもっとも入念に掘りおこされる必要がある。

私は、幸徳秋水らのいわゆる大道事件の判決と処刑に触発されて蘆花が一高で行なった講演「謀叛論」や、難波大助の虎之門事件に際し摂政宮への公開状をしたため、死刑廃止論を展開したことなどに、内村鑑三らともつながる明治の良心を見る。彼の愛国心は、暴力否定（但し家庭では随分暴力行使した）や絶対平和（但し彼の周辺には紛争が絶えなかった）の強い主張に裏打ちされていた。蘆花の矛盾にみちた行実は、言わば粗鋸のようなものであって、そこからは明治・大正の二代をつらぬく他の作家の誰にも見出されない貴金属が、ふるいにかければ輝き出るであろう。同志社は蘆花を創造したことに大きな誇りをもってよい。

（甲南大学教授）

教育者としての新島襄先生

湯 浅 八 郎

蘆花は、私にとって叔父でありましたが、お天気屋だった。毎夏、逗子へ海水浴に行ったが、あるときなどは、蘆花は狂乱の態でそばへも寄れぬぐらいで、畏敬していた。しかし、一番印象に残っているのは、「自己に誠実であった」という点である。

私は、中学校だけしか日本の学校を出ていないので、恩師というものがない。しかし、新島先生を恩師と言えは言える。私の叔父、徳富猪一郎は、新島先生を神のように考えていたが、唯一つ新島先生の八重夫人に対する態度には承服できなかった。当時まだ日本は、男女平等の風はなかったため、新島先生が馬車に夫人と同列で乗られるのは反撥を感じたのであろう。しかし、夫人を大事にされた新島先生であるのに、「女子教育」について一文も残されていない。この点、福沢諭

吉は、「女子教育」について論じた文献がある。その点で異なっている。しかし福沢も、家庭では案外古くさく、福沢夫人も「残年」の節は社会のお役に立つこともあろうと手紙に書いていた。また、新島先生の教育者としてのバックボーンは「キリスト教」であった。新島先生は、徳川末期にまず「蘭学」を修めたが、これからは英語の世界であると感づいて、英語の勉強をはじめ、ボストンに着いたとき、恩人ハーディさんに「生い立ちの記」を英語で書いた。

なお、私は新島先生に三つの疑問をもっている。

第一の疑問は、新島先生は、先に少しふれたごとく、「女子教育」についてどのように考えられたか分らない。今、同志社女子大があり、私は、これの設立に賛同したが、先生

が生きておられたらどう考えられるであろうか知りたいと思う。

第二の疑問は、宗教と科学の関係をどう考えられたかである。これが分らない。

第三の疑問は、歴史を進歩せしめる「非凡なる凡人」をどう考えられたであろうか。

excellentの人々をどのように評価されたか分らない。なぜなら、先生は、教育の本質は、「二三の英雄を育てるにあらず」といわれ、男女平等の考えをもって、大衆教育をすることを考えておられた。またデモクラシーということを考えられ、国民のことを決して「臣民」と書かず「人民」と書かれた。こうした先生が愛された国民大衆と人格の歴史を進歩させる。excellentな人々をどのような関連づけて考えられたか、この点が分らない。

とにかく、先生はキリスト者として、「徳育」ということを根本において教育に当たられた。ここに教育者としての先生の真面目がある。

(元総長)

萬年筆と私

—— ウォーターマンの回想 ——

川 並 秀 雄

近頃、明治時代に出版された書物が、驚く程の高値になった。草田男の「降る雪や明治は遠くなりけり」という句が、昨今、しきりに引用されている。

その明治も、やがて百年になる。古代ギリシャの哲学者の言葉でもないが、われわれ明治生れの者にとっては「万物は流転す」という語が、昨今殊に、しみじみ感ずるようになった。

最近、新聞雑誌で、萬年筆の広告がすくなくなり、世はまさに、一九四〇年にハンガリーのラジスロウ・ピロの考案したボールペンの時代となった。もうこの頃の若い人は、ウォーターマンなどといっても、何のことか、わからない人が殆んどであろう。

この情勢は、日本ばかりでなく、アメリカでも同様である。私が七年前にアメリカで生活していた頃は、ウォーターマンの

時は近く。何時しらず、柔かに影してぞゆく。
時は近く。赤き蒸汽の船腹の過ぎゆくごとく。

北原白秋「おもひで」(明治四十四年、東雲堂)

瓶詰インクも、カートリッジも、まだ店頭に出ていた。

私の今尚、愛用して、この原稿を書いているウォーターマンの萬年筆は、今から四十四年前の大正十一年に買ったものだから、まことに文字通り、萬年筆である。

私は学生時代に、ウォーターマン萬年筆の広告を、丸善の「学鑑」で見で、どうしてもほしくなったが、当時拾円という大金は、とてもこの萬年筆を購入する代金として支払う余裕はなかった。何しろ私が学んでいた高校の寮費が、一ヵ月拾五円で、小使銭として五円をあてていたので、とても手に入れることはできなかった。そこで私は一策を案じ、夏休みになっても郷里、名古屋にも帰省しないで、寮にただ一人とじこもり、その頃、學術雑誌が懸賞募集していた論文に応募して、一等賞二十円を獲得しようという、まことに虫のいい計画を立てた。

論文の宿題があるから、これを書きあげてから帰国すると、両親に便りをして、学校の図書館に通うことにした。

先づ、ジョン・ラスキンの *Unto This Last* (この後の者に) *Every Man's Library*, ed. by Ernest Rhys, 1920 を「丸善」で購入して一通り精読した。

これは当時、余り読まれていなかったものであったが、河上肇博士の著書にヒントを得て、これを研究しようと思った。

図書館にある限りのラスキン研究書を毎日読んで書きあげたのが、「*Unto This Last* に現はれたる『富』の考察」という、未熟なものであった。

ところが、幸にも一等に当選して、待望久しきウオーターマンを丸善から買うことができた。第一型、第十五号 *Fine* であつた。

何しろ、長い間、ほしくてたまらなかったものだけに、とてもうれしく、この万年筆をいつも机の上に置いて眺め、やたらに友人達に、便りを書き送ったものである。中学時代の親友、名古屋市長杉戸清君、日本石油精製、副社長新井浩君、名古屋工大学長佐藤知雄君、最高裁判所長官横田喜三郎君の如きは、さぞかし迷惑をしたことと、申し訳なくおもっている。

ウオーターマンの愛用家は、私はかりでなく、九州大学教授というよりかは随筆家の高橋義孝氏も、高校一年生の時に、ウオーターマンを購入したことが、「日本再発見」(昭和三十八年三月、ダイヤモンド社発行)に見えている。

丸善の明治四十五年六月に発行した「万年筆の印象と図解カ

タログ」によれば、わがウオーターマン愛用家のうちに、二葉亭四迷がある。

明治四十年七月五日附、内田魯庵宛、絵葉書に「バイカル湖畔より御機嫌を伺ひます」と、ウオーターマンで書き送った写真が出てゐる。この書簡は、岩波版、「二葉亭四迷全集」にもない、未発表のものである。

仏教評論家高島米峰も、大小二本のウオーターマンを常用し、ウオーターマンは「太いもの、細いもの、安いもの、高いもの、軟いもの、硬いものなど、種々ありと雖も、大体に於て、極めて大夫にして、惜気もなく使へるといふ点に於て、優れるが如く」と書いている。

「万年筆と丸善」というところを見ると、丸善が万年筆を初めて取寄せたのは、明治十三、四年頃のことと、万年筆という名称は、「その頃、通称『萬吉』で通っていた支配人が主として肩を入れて売弘めに尽力していましたので、誰いふとなく萬吉筆、萬さん筆を變形」したという伝説を紹介している。

明治三十八年九月、ポーツマスで日露戦役の講和条約を締結した時、ロシアの主席全権ウイッテが、ウオーターマン第一型十八号で署名したので、平和締結のペンとして有名になった、ということが記してある。

六尺豊かな偉漢ウイッテのたくましい手に、ペン先が一番大形で、長さ六寸七分もあるウオーターマンを握って署名する姿が想像される。

さて私は、この愛用のウオーターマンを、昭和三十四年滞米

中、ふとしたはずみに、大学の寮の床に落し、ペン先がいたんでしまったので、製造元へ、多年愛用のいわれを述べ、修理の依頼をした。

しばらくして、すっかり修理した上に、鄭重な挨拶状と共に送り返された。手紙を開いて見ると「Fine Fountain Pen, Inks, Pencils Since 1884 (西暦17年)」と印刷した下にある会社名の「Waterman Pen Company, Inc.」が斜線を引いて改名され、Waterman Bic Pen Corporation となっているので、ふしぎに思っていた。それから年が経つにつれ、アメリカ国内を旅行して気づいたことは、ウオーターマンの万年筆もインクも少なくなったことである。ロンドンでは時折、店頭に陳列してあるのを見た。

その後帰国して、少しおちついてから知ったのは、我国でもウオーターマンのインキがすくなくなり、不便を感じて来た。

馬場孤蝶が「万年筆の経験」で、万年筆を使用する際、インキの選択は大切であって、ウオーターマンには、ウオーターマンの会社で製造されたインキを用いないと、滑らかにインキが流れ出ないという、注意もあったので、私はどうかしてウオーターマンのインキを入手したいとおもっていた。

幸に昨年、私は再び欧米にしばらく旅行することになったので、できるだけ瓶詰と、カートリッジを買うつもりでいた。

アメリカに来て驚いたことには、もうウオーターマンの万年筆も、インキも、どこをたづねても売っていなかった。恐らく、パーカーやシェーファーにおされたのか、ボールペンの需要増

大に売れ行が悪くなったので、生産を減少し、或は販売地を他国へ移行したのかもしれないとおもった。こんなことで、折角私の永年愛用してきた万年筆とも、お別れかとおもうと、いささか淋しくなった。

私はこうした悲しいおもいをもって、アメリカを去り、ロンドンに移ったが、幸にも、ここでウオーターマンのインキを発見した。もちろんロンドンでも、ボールペン時代で、この前には百貨店などでよく見かけたウオーターマン万年筆も、今はその影をひそめていたが、インキだけはこうして入手できたことを喜んだ。

その後、フランスでも、デンマークでも、ウオーターマンのインキを入手したが、そのいづれもパリで製造したものであった。しかし、万年筆だけは、発見できなかった。成程、ウオーターマンの会社は、今尚、アメリカに存在するかも知れないが、万年筆の製造は停止し、八十一年間にわたって、万年筆界に君臨したウオーターマンも、ついに凋落したことがわかった。

それにしても、私の若き日に、ウオーターマンを、間接にせよ、与えてくれたのみならず、ラスキンの研究を契機として、英文学へと開眼させてくれたことを感謝して、英国北西部なるコンストン湖畔を訪れ、教会墓地にある、ジョン・ラスキンの墓をもうでて、花輪を献げた。

(商学部嘱託講師・英語)

同志社をさった人のこと

竹 中 和 郎

私は中学校から大学を卒業するまでの十年の生活を同志社とともにしてきた。そうして、古い静かな都の緑のある学園をあとに、混雑した大都会に住みついてすでに十年にもなる。私がここに来たのは、大学生活の延長と、研究対象にえらんだ「都市」をじかに経験することを期待したからであった。「いつかは住みなれた町にかえり、岩倉などの住みあらした野原を訪ね、冷えた新鮮な空気がすえる生活にかえりたい」と夢みているうちに、この生活に慣れてしまったようだ。私は自分の青春時代のすべてを同志社にかけた。そうして自分なりに同志社を愛し、その生活に誇りをもつことができた。それは今でも、自分の思想や人格形成のうえにダイナミックな力と影響をあたえているように思える。

同志社での長い生活は、私にとっては限りない想い出を残している。その中で、とりわけ私が接することができた三人の恩師のことを書きとめておきたい。その一人は、中学校時代の英語のN先生である。こゝわい、この先生は、私たちへ教科書のない二年間にわたって英語の文章を毎日の

暗誦することを強制された。その英作基礎構文は、いまでも口をついて出てくる。N先生はいわれた。「私がこの世を去っても、このイジワルな『グー』（あな名）というジイ、同志社の伝統的な英語の力は、諸君たちに残るだろう」と。N先生はそのすぐあとに本当に去られた。

岩倉時代の不勉強で生意気な私は、まさに誇を失なっていた。その頃のもう一人の印象の強烈な先生の一人に、背丈の高い『オバケ』先生がある。エール大学で倫理学を専攻された英作文の先生だが、私にとっては室内楽の精力的な指揮者として、そのM先生をした。そうして、クリスマス・イヴとメサイアとともに、先生の想い出をもっている。ある出来事ののちに、栄光館のステージにあがることを拒んだ私に、先生は予想に反しておだやかにいわれた。「君が去年弾けた同じ曲を、今日どうしても弾けない悟ったのなら、それは喜ぶべきことだ。なぜって、それは進歩したんですよ」と。私はその皮肉な思いやりのある叱責のうちに思い上った過信を深く反省させられ、強くはじた記憶をもっている。そのあと先生は急去された。先生の愛唱

された「くしき平和よ」という古い讃美歌とともに先生の人格を忘れられない。

そこで、私は大学のある今出川に再びもどった。そこで私は当時のS助教授をしたのである。私と先生の接触は「新聞発達史」という専門外の特講に、好奇心から出席した頃からはじまった。先生とともにある多くの想い出のうち、学生運動の資金集めに厚かましく訪ねた私に、「昼めしは喰わないことにして」といって、ガマ口の中身全部を強い激励のお言葉とともにいただいたこと、などもある。

しかし、もっと強烈な印象は、レポートを先生のもとでニワカ勉強の私が必死にまとめたことがある。私は先生の指示にしたがって、生れてはじめて五十枚の論文らしいものを二週間ほどかかって書いた。その不出来な内容は別にして、先生は私に、「物を書き・まとめ・考え・主張し・そして苦痛のうちに楽しむこと」を学ばせてくださった。私

同志社——その断片的印象

私のはじめて同志社を訪れたのは、たしか一九四五年初夏のこと。東京で戦火にあい、祖父（故伊藤勝義・校友・

は卒業で、職業から物を書く機会が多かった。執筆の途中のくじけそうなとき、自信を失いそうになるとき、このことを思い出し勇気づけられる。S先生と私とエピソードは限りなくある。私はある正月、先生と父と三人で、帰省さきの京都の家で久し振りに楽しく語りあった。そしてあわだしく雪のふる京都をさった。しかし、そのときが、この世界で、この二人と会えた最後であることに気づかなかった。

私の現在の専攻は「都市の研究」である。そうして、私は現代都市の現実を積極的に好まない。同時に、こうした想い出をもつ京都と同志社の生活が、都市化の波におかされない田舎らしさ・ヒューマニスティックな伝統と誇りを残し、そして実践にふみ切る力をあたえるところであることに愛着をおぼえている。

（校友・日本社会事業大学助教）

伊藤 義清

元丹波教会牧師）たちの住む京都に疎開、ほどなく近江八幡に移って、京都まで通学していたころだ。父（伊藤昌義

・昭五専神卒・武蔵野緑教会牧師）に連れられて、京都一中の生徒だった私は、古めかしいレンガづくりの神学館の入って突き当りの部屋で、神学部長有賀鉄太郎教授（神戸女学院長）と出会った記憶がある。父にしてみれば、三代目の同志社人に、という願いがあつたかもしれない。汽車通学で、草津から乗ってくる同志社中学の生徒と仲良くなつた。八幡で必ず席をとり、彼を草津でよび入れるほど意気投合したほどだったが、どうしたことか彼の名を思い出すことができない。いま大沢商会社長の沢善朗氏や、京都YMCA主事の上阪博信氏らと同じ学年にあたるので、いろいろたずねてみたのだが分らなかった。

同じ年の八月十五日のひる、その草津の駅で、「天皇陛下の放送です」という駅員の声に、駅長室に駆けこんで、ラジオを聞いた。そのときは何のことやらわからなかった。戦争に負けることなど、ゼッタイあり得ないと思ひこんでいた中学一年生にとって、敗戦の報は正しく晴天のへきれきであつた。

再び、同志社神学館を訪れたのは、神学部の入學試験の日。神学部の入試が日曜日にあることにすく抵抗を感じて「生まれてはじめて教会の礼拝に出なかつた日だ」とひとりで憤慨したものだ。やがて入學。時の部長、故魚木忠一教授に此春寮の村山盛敦寮長（クリスチャン・アカデミー修学院ハウス牧師）を紹介されたが、彼がバカにコワわつた印象が残っている。それもそのはずで、宗教部主事飯

清氏（靈南坂教会牧師）らと共に、リーダーとして活躍した同志社刷新運動に成功（？）した翌年だったのだからムリもない。

はいってからのこと、同志社学生新聞のただ一人の神学生記者として当局にいらまされたり、広告とりで封切り映画を欠かさずみて歩いたり、おかげで、ドイツ語を失敗したり、お話はヤマほどあるのだが「伝道一本槍。教職課程などどるのは邪道だ」などとうそぶきながらも、教生などしたのが（当時の同中生に津川雅彦あり）いま、役に立っているのだから、不思議なことだ。

昨年の十一月中旬「同志社創立九十周年」という『月刊キリスト』一月号のルポをかくため、訪れたときは新学生会館問題でモメていた。住谷悦治総長、秦孝治郎理事長はじめ多くの教授、職員、学生諸氏に会つての結論は「何と対話のないことか」。しかし、正直なところ、キリスト教学校のもつ問題点をはつきり指摘できるところは、いま同志社しかない。つまり、クリスチャン・ジャーナリズムで、学校を批判することはタブーになっているということだ。このことは、同志社が量的に拡大したための不感症か伝統の自由の精神のゆえか、その双方ではあるうか、いずれにせよ、改めて同志社に学んだしあわせを思つた。それだけに新しい革袋をととのえた神学館の新しい酒が気がかりなのである。



ビートルズ

高田峯尾

ビートルズと言えば、ただ何となくキャア、キャア

さわぐ女の子たちや、縦横になげかけられる紙テープにからみつかれながら、ギターを気どったポーズでひいている髪のがい青年たちをぼんやりと連想していた私は、英国へ行って見ではじめて、彼らが民衆から親しまれ愛されて、一三波春夫などとはちよつとちがつた意味で一色々な年配や階級の人たちが、一ように関心をもっているのにはちよつとびっくりした。

丁度ビートルズがアメリカに行っていた時のことである、あまりにすごい歡迎陣におびえて、飛行場から落人のように裏道をとってこつそりと宿にはこぼれたという記事が、ふだんはあんまりそういうことには縁のなさそうな大新聞の片すみに見出された時、私は南海岸にちかい町に住むW氏のところにいた。W氏は六

十をちよつとこした英国教会のキャノンである。

昼食の時に卓をかこんだ人々に私はなぜビートルズがそんなに人気があるのかしら、というようなことをたずねてみた。

「彼らは実に健全な自然ないい青年たちだと思います」と、W氏が言った。

「そう、ほんとうに自然で、ちつともぶつ、たところや、いやらしいところがない人たちですよ、清潔ですね」と、いかにも熱心に言ったのは、模範クリスチャンと私が心の中で評していた老婦人だった。

一座はみんなうなづいていたが、十八になるチャールズがちよつとはにかんだようにつけ加えた。

「とにかく、すごく元気で明るくて、感じのいい人たちだなあ。」

その後逢った人々たとえばインテリ女性をしょって立ったようなGさんや、上流社会というものに服をさせたような未亡人等々の中に、ハッキリとしたビートルズの支持者を見出したのである。

たかが女の子たちにさわがれて、いい気になっている青年のグループくらいにしか思っていなかった私は、オヤと見直すきもちになった。

テレビに出て来る髪の毛の長い青年歌手はみんな大同小異だと思っていた私も、だんだんに、まがいものと、本物との区別がついて来ると同時に、まがいのものがいかに多いかに気がついた。髪の毛をふさふさと、ミルトンの青年時代の肖像のように肩までたらし、流し目で観衆をながめ、しなしなと様子をつくらせてうたつ、まことに胸がわるくなるようなやからが沢山いるのだ。

こうした歌手たちの影響かもしれないけれど街をあるいていても、髪長き青年は断然多い。それがブロードで目が青くて、頬がホンノリとあかく、派手な色どりのシャツを着ていたりすると、一体これは、と首をかしげることもしばしばである。

ある男の子だけの学校——今でも英国にはそう言う学校がかなり沢山あるが——で一人の生徒があまりながい髪をして来たので、先生が、君はリボンで結んだ方がうるさくないんじゃないかな、と半ば皮肉ったところ、翌日その子はピンクのリボンで結えて来たという。

こうなると、どこかで、何かがちよつとおかしくなっているのではないかな、と思わずにはいられない。

友達のある日こう言うのである。

「あなただって、若い人たちを扱っている以上はビートルズの映画くらいみておく必要があるんじゃないかしら？」

そこで映画館へ行ってみると、切符売場のまわりにガヤガヤしているのは、いわゆるハイティーンとまでもゆかない連中で、私たちのようないい年をした者は見当らない。いささかてれて中へはいると、ひろい館内をうめているのはやはりティーンエージャーばかりであつた。よくもまあこんなに悪ふざけがつづくと思ふような映画だったが、見ているうちに不思議にビートルズ達に好意をもつようになったのである。中には知人によく似た顔があつたせいかもしれない、いや味がない、健全だ、明るい、と言つた批評は決してまをはずれていないと知つたのである。

英国へ行つてからよくテレビを見るようになり、ビートルズまがいの歌手たちもよく画面の上で御目にかかることになったわけだが、英国へ行つてもフランスへ行つても、テレビは日本ほどあまねく津々浦々に普及してないことがわかつた。高価なせいもあるだろうが、見る必要がない（実は私もそう思っているのである）と考えている人々も多いのではないかと思う。

同時にまた当局の方でも、それほどテレビの普及ということに力を入れているといったところも見えないように思われる。ともかくも、あのうるさいように屋根の上に立っているアンテナ、時には一軒の屋根に二本も立っているそれを見ないのもちよつとホッとすることだ。チャンネルの数からいっても、英国でもフランスでも二つ以上はないので、日本ではいつもあると言うと、そんなにあつてもそう見られるものではないし、よけいなことだというような返事である。

ことにフランスでは日中、あつからんとテレビの前にすわりこんでいるような閑人はそうはいらない。仕事から帰って来てゆつくり食事をして、さてスイッチを入れるということになる。とにかくテレビの開始時間は午後六時から以後と言うわけだ。十一時になるともうおしまいである。

英国ではまだ明るいうちから始まるが、日本のそれに比べるとプログラムはよほど単純である。古い映画をながながと時間かまわずに見せてくれる。フランスでも同じである。

何年か前まだボガードが若かった頃のものを何年ぶりかで見たこともある。ニュースや天気予報のアナはどちらの国でも美美女を使っている。ことにフランスではほれほれするようなブロードの美女が愛きょうタップリに、明日は雨でございましょうなどとアナウ

ンスしてくれる。男ならでも思わず見とれてしまうところがある。

面白いのは子供の時間である。これは日本のように毎日あるのではなくて、木曜日の午後五時頃から一時間あまりに限られている。フランスでは木曜日に幼稚園や学校がお休みになるからである。出しものは動物の生體とか、音楽会とか、時にはメリー・ポピンスからぬき出したものなどがある。しばらく続いて子供たちの人気をうばったのは「快傑ゾロ」と「ミッキーマウス」である。いずれも日本の子供たちからはあんな古いもの何だいとはかにされる代物であるが、ミシエルもクリストーフも、ヴェロニクも、目の色を変えてテレビの前に集ってくる。

中にはすっかり浮かれてしまつて、画中のゾロと同じことをやりながら室中を走りまわっている子供もある。子供たちはこの短かい間この上もなく満足し、エンジョイして、大人のテレビまでのぞくとも思わないのである。テレビからの子供たちへの悪影響が問題になっているこの時代には、ほんとうに出来ないようなちよつとばかり羨ましいような話である。

英国のコンマアシャルには犬猫用の食物や床みがきのクリーナーの類がいやに多いのはどういうことだろうと、これはちよつとわからないことの一つである。

(女子大学教授・英文学)

ベリア・カレッジ



洲崎 い つ

グラス・イズ・ブルー」と言われる、豊かに、青々と、牧草の生い茂ったケンタッキの平野を、いくらか、アパラチャの山並みに近づいたところ、レキシントン市から、ほど遠くない処に、静かで、小さな学都、ベリアがある。ベリア・カレッジのある町である。

もう六年近くも前ではあるが、この町に、十日ばかり滞在したことがある。私はここでユニークな、ベリア大学の一端にふれ、アパラチャの山岳地帯に残る、アメリカ開拓史初期の、たくましい移民たちの生活につながる素朴で美しい民芸のかずかず、哀調を生びたきれいなバラード、に接する経験を得たのである。ベリアは、一年余の、私の、アメリカ生活のなかで、最もなつかしい、度々、訪れた土地の一つである。

当時、友人にかき送った手紙の一部を引用して、あのすばらしかったベリアの想い出をもう一度、たどってみたい。

× ×

「五月十四日から、二十二日まで、ケンタッキの片田舎にあるベリアですごしました。ベリア・カレッジの名は聞いてはいましたがここへ来て、みるもの、聞くもの、すべてが

おどろき。とてもすばらしい学校です。

ウエスト・バジニア。バジニア。ケンタッキ。ノース・キャロライナ。テネシー。ジョージヤ。アラバマの七州に及び、のびている米大陸東部の唯一の大山脈、アパラチャ。この山岳地帯は、貧しい人たちの多いところ。ここに住む人たちに、教育の機会を与えるため、一八五五年に設立されたのがこの学校です。最初は、初等、中等教育を主体にしていたが、義務教育の普及と共に、その方の教育は、公立の学校で行なわれるようになったため、一八六九年に、カレッジレベルの教育が含まれるようになり、現在ではこのカレッジが、ベリアの教育の主体となっています。

この大学の学生の九割は、アパラチャ山岳地帯の貧しい家庭から来ており、言いかえれば、まづしい学生でなければ入れないのがこの大学の特徴です。

従って、学生は、授業料を払う必要がありません。安い、寄宿舎の費用だけが、必要な経費です。すべての学生には、毎週、最低、十時間のアルバイトが、学内で、保証されています。大学の事務室、食堂、病院、実験

室、印刷室、寄宿舎、学校の農場、ベーカー
ー、図書館など、どの大学でも考えられるよ
うな職場が、アルバイトのために与えられま
す。この他に、ベリア独特の職場がありま
す。それは、ブーン・ターバンと呼ばれる、
ベリア・カレッジの運営するホテルです。

私が、この期間、滞在したのも、このブー
ン・ターバン。これまで、数多く泊ったホテ
ルや、モートルのような、ピカピカ飾りたて
た美しさはありませんが、大へん落着いた、
あたたかみのあるホテルです。各部屋にある
家具、装飾品は、一切、学生の手でつくられ
たものとのこと。ホテルのボーイさん。フロ
ントの係、メイドさん、食堂のウェイターや
ウェイトレス、など、管理職をのぞいて、一
切がベリア・カレッジの学生です。趣味のよ
い飾りつけをした各部屋は、いつまでも滞在
したくなるほど、居心地がよく、食堂の食事
は、アメリカとは思えないような、無類のお
いしさです。ことに、ブーン・ターバンの、
ホット・ビスケットの味は忘れられないすば
らしさ。

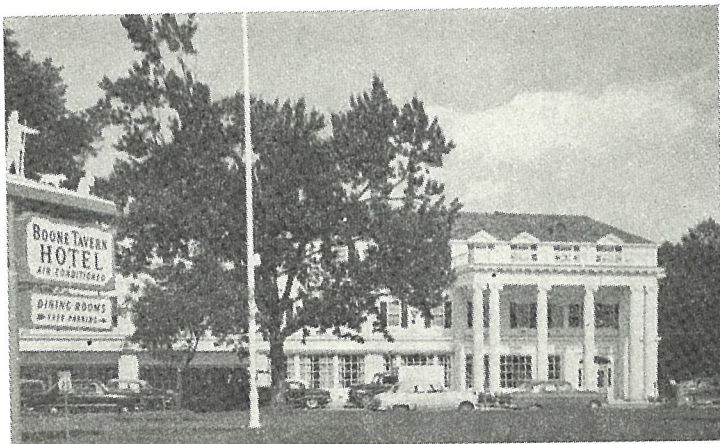
働いている学生も、キャンパスを歩いてい
る学生も、一般に、大へん質朴で、働くこと

の尊さを、充分理解していると言う感じです。
このカレッジが、モットーとしている、ラス
キンのことは、「健全な思想は、労働によっ
つてのみ、培われ、思想あつて、はじめて、
労働の喜びを知る。この二者をきりはなす
ことは罪悪である」の哲学が、このキャン
パス全体を、支配しているのでしょうか、
非常に行き届いた校舎内外の清掃が、それ
をものごとくしているようです。

ここへ到着した翌日、キャンパス内で、
日本の留学生、S子さんに会いました。心
理学専攻のお嬢さんですが、このひとは、
ここで陶芸をならって、すばらしい陶芸家
になっています。学内の、ギフト・ショッ
プには、S子と、署名した見事な陶芸品が
いくつも売られているのをみました。

また、キューンさんという韓国の女子学
生とも知り合いになりました。上海の日本
人学校で教育をうけ、韓国語より、日本語
の方がわかると言う人。社会学を専攻し
て、もう、来月は、卒業の予定ですが、こ
のお嬢さんは在学中、ウィービング（織物）
のコースを修めて、その才能を高く買われ
ていると、言うことです。キューンさんが

織っていた美しい織物の、鮮かな色彩が、今
も、目にうかぶようです。
事実、ベリアは、その秀れた工芸品でも、



よく知られているそうです。キャンパスの内に、特別の、インダストリアル・アート・ビルディングと呼ばれるモダンな建物があって陶芸、木工、金工、ジュエリー、織物などの講座が、ベリアの学生のみならず、教授や、その家族たちにも開放されています。

家具、装飾品、織物、箒、陶芸品、お菓子など、学生たちが、習得し、つくり上げた作品は、みんな、格調高い芸術品です。キャンパスの、ギフト・ショップは、日本の、民芸品をうるお店のように、すばらしい学生たちの作品で、いっぱいです。何もかも、大量生産でつくられた画一的な商品をみなれた目には、信じられないような魅力あふれたギフト・ショップです。

ベリアの町は、カレッジのために存在する町。ほとんど、町らしい賑わいはありません。環境の静けさは格別です。若い学生たちには淋しすぎることさえあるようなところですよ。

この大学はまた、ベリアの町のために、給水や、消防の面でも、技術と、学生の手をかし、近くの山村の人々のための、巡回図書館を開設したり、たのしいお祭を催したりして地域社会のための奉仕もしています。

居心地のよい、ブーン・ターバン存在はまた、たくさんのお老人たちに、いこいの場を提供しています。同じ、老人天国でも、フロリダや、アーカンソーのホットスプリングなどとは、何と言う違いでしょう。一口で、いえば、上品なところと、説明すればよいかも知れません。

先日、出あった一人の老婦人は、二年前、御主人と、一人息子に、死別して、悲しみのどん底にあったとき、ひとのすすめ、ベリアに、引越してきたと言うことでしたが、ベリアの毎日は、とてもたのしいと、悲しみを忘れたように、明るく話してくれました。大学のキャンパス内で開かれる各種の学生の催し物に出席していると、けっこう、たのしい日々が過せるのです。しかし、大がいの催し物は、夕方六時に始まって、八時には終わります。八時から、寄宿舎の勉強時間に入るためです。

数日前、私も、このおばあさまの仲間入りをして、演劇部のお芝居をのぞいてみました。南北戦争のときの物語を演じた、一幕もの、三十分ばかりの短かい芝居でしたが、終ると、演劇部のアドバーザーと思われる、教

授らしい人が指導して、観客に、この芝居について討議させます。はじめは、この題材の選択がよかったかどうか。つづいて、道具、舞台装置についての批評。ずい分活発な意見がでていました。そして、最後に、役者についての批評が行なわれました。幸い、この芝居の成績は、二、三の細かな点をのぞいて、おおむね好評でしたが、時には、「出来が悪いから、研究しなおして、もう一度、来学期にやりなおせ」と言う結果になることもあると、あとで、一人の学生が話してくれました。

南部の一部であるのに、人種差別のないことも、印象的な事実のひとつです。

短期間の訪問客として、のぞくことのできた、ベリア・カレッジの、ほんの一面です。如何ですか。」

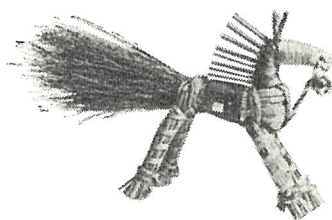
(昭二二大英卒・ガール・スカウト日本連盟理事)

* * *

* * *

西成の柿

竹 中 正 夫



1

「西成の柿がとられなくなりました」と益谷さんがうれしそうに語ってくれた。益谷さんが館長をしている西成社会館の庭に一本の柿の木がある。毎年柿の実がみのが充分に熟さないうちに近所の子供たちが来て食べてしまう。学校給食を欠食する子供の多い西成である。やむをえないと言えばそれまでだが、いつになったら庭の柿を西成で食べる日がくるだろうかと益谷さんは辛抱づよく待つことにした。ところが昨年の秋には、社会館の柿の実が充分のるまでとられなかった。益谷さんは頬をほころばせ、わがことのようによこんだ。

益谷さんが同志社大学の大学院神学研究科の修士課程を了えて西成の社会館に赴任したのが昭和三十三年の春であった。就任式のときにはわずか十名くらいの人しか集まらなかった。

しかし今日では、診療所、児童館、西成教会、西成保育園と四つの部門からなる社会館として数百人の人々が毎日この施設を利用するようになっていく。柿の木はみものようになったのである。診療所には尾崎淳氏が献身的な働きをしておられる。むつみ夫人は故魚木忠一教授の長女である。児童館の館長の岡本栄一氏は、同志社大学文学部で嶋田教授の指導の下に社会福祉を専攻した人である。社会館には同志社大学神学部の学生松井元君や

社会学科の新野七子さんなどがその働きに参加している。

一九五八年、同志社大学の工学部で教鞭をとっておられたエドワード・ダウブさんの奥さんの御両親が日本を訪問の途次、飛行機事故で亡くなったことがあった。そのとき、ダウブ夫妻は「部落地域で働く若い伝道者のため」にと指定してその保険金を同志社に寄付し、御両親の名をとってサリバン基金と名づけた。益谷さんは、そのサリバン奨学金をうけた最初の人である。彼はそれで、同和教育についての研究をなすと共に、児童館のなかにサリバン文庫を設け、部落問題についての文献を集めている。

2

益谷さん自身が同志社にきて神学部で勉強するようになるまでには長い経過があった。益谷さんの家は北海道函館にある。お父さんは末吉といって陸軍の軍人で特務曹長であり函館の要塞司令部の砲台監視をつとめていた。お母さんはあいといって暖かい性格の持主であった。軍人としてのりりしい気質ともいやりのある愛情にとんだ性格を父母から

うけついだ。

益谷さんの家は函館の旧組合教会の真向に
にあった。函館の教会は、明治四十年の大火
大正十年火災で全焼し、また昭和九年の大火
災で焼滅した苦悩の歴史をもっている。また
教会内には函館^{はと}隼人の血をうけた元気のよい
連中が集り、「函館トッ組み合い教会」と評
する人もあったほどであった。当時の牧師は
片山幽吉で一名「江州先生」ともいわれてい
た。彼は江州長浜在の出身であった。片山は
明治三十六年六月に同志社神学校を卒業し、
岡山県の西大寺、天津、高梁などで伝道した
のち、大正六年、函館教会の牧師として赴任
し、昭和二十一年三月永眠するまで約三十年
間同教会にとどまって多大の感化を青年たち
に与えた。

片山は、今泉真幸、木村清松とならんで旧
組合教会にあって一風変わった三羽鳥的存在で
あった。彼は禅を深く学び漢詩を詠じ、日本
人としての信仰の把握につとめた人である。
魚木先生は片山牧師のことを禅的基督教の境
地を開いた日本類型の代表的な例として高
く評価していた。高梁教会に伝道中、盛んな
靈感の起りつつあったときに生れた次男大輝

が、大正七年函館伝道中に大腸カタルで死
んだとき、彼はこううたっている。

うまいと思えと出ずるわが子かな

大正十年四月十三日の函館の大火で約二千
六百戸の家々が灰燼と化したことがあった。
そのとき赴任いらい三年余、苦心慘胆して造
りあげた会堂が全焼したが、彼はこう詠じて
いる。

血涙^ち瀝^り来^り三星霜

疑成^あ頌^う榮^え讚^{さん}神^{しん}堂^{どう}

一朝毒火^{どく}燄^{えん}灰^{はい}燼^{じん}

人間万事色即空^{にんげんばんじしきそくくう}

心血をふりそいで漸く出来上った会堂も
一^い炬^こにあえば、一抹の灰と化する悲哀をつぶ
さに味わいながらも、新しい勇氣と希望をも
って片山牧師は立ちあがった。

「我ら四方より患難を受くれども希望
も窮せず、為に方尽れども希望
を失わず、倒さるれども亡びざ
る」(コリント第二、四一八・
九)はキリスト者の生涯である
ことを胆に銘じ、焼跡の中で会
堂再建の祈りをささげ、全国の
教会に訴えた。すると、大火か
ら五日目、ごったがえしの罹災
地に廻り廻って一本の電報が届

いた。

「タカギ一センエンキフス、ゼヒサイチクニ
トリカカラレタシ、ミヤガワ・タカギ」

とあった。高木さんは当時大阪の万年社の社
長であった。片山牧師とは一面識もなかった
が、大火の報を伝えきいて早速募金に応じ
た。これに呼応して北海道部会からは、「早
く募金に來い、道内千円は引き上げる」とい
う通知があり、片山牧師を鼓舞した。当時の
教会には暖かい連帯的な血が交っていた。益
谷さんが生れたのは大正十一年八月五日であ
り、木造洋式の新会堂が建てられて間もなく
であった。



益谷寿氏

益谷さんのお母さんはタバコ、化粧品、雑貨、切手などを売る小さい店を出していた。

教会の真前なので片山牧師は切手を買いにしつば寄ったが、そのたびに益谷家の子供たちの安否を問うのが常であった。

昭和十五年、十八歳のとき益谷は健康を害したとき、片山牧師に祈って貰った。それが奇縁となり、聖書を学ぶようになった。

中学を出ると、お父さんのすすめで秋田鉱山専門学校で勉強した。砲台に勤務していたお父さんは重砲の火薬の免許状をもっていたので、息子がダイナマイトの研究をすることになった。戦争がきびしくなるころで、秋田鉱専では航空燃料のためと称して、松の根ツ子や砂糖キビや油泥から燃料をとることなどをやってみたが、あまり効果はあがらなかった。しかし、人間の魂をゆさぶるダイナマイトを彼は福音に発見した。

秋田でははじめ寮にいたが、大紹奉戴日の行事などのため教会出席が出来なくなるので教会に泊めて貰い、会堂番をしながら、樽山教会の土合竹治郎牧師の薫陶を受けた。その

ころ土合先生はギリシャ語、ヘブル語を教え、主の祈りをギリシャ語で唱えなくては食事の箸をとらせないという厳しい訓練をした。

やがて終戦の年の九月、鉱専を卒業して函館に帰ると間もなく、片山牧師が逝去した。

片山牧師の人徳と聖書に生きる信仰に感化された青年たちがそのあとを継いで生涯をキリスト教の伝道のために献げようと決意した。

彼らは相前後して東京、京都に出て神学校に入った。総勢十一名のうち、東京に出たものが七名、京都の同志社大学神学部に来たものが四名であった。そのうち最後まで初心を貫徹して困難な牧会伝道の働きをなしているのは、東京にいった七人のうちでは一人だけであとは、挫折したり他に転向した。ところが

京都の同志社に来た四人は随分多くの苦難と可成り曲折の旅路を歩んだが、神学教育の課程を了えて、伝道者として活躍している。戦後長い闘病生活のため中断しながらも遂に神学校を了えて、岡山県や大阪教会で牧会に励み、目下シカゴの日本教会の牧師をしている米倉義一（同神二七年卒）をはじめ、鈴木三治（同神院昭二七年卒）益谷寿（同神院昭三三年卒）それに、十三年間函館の市役所で働

いたのち遂に伝道者となる決心をし、同志社に来て、この三月大学院の修士課程を了えて牧会伝道に当る柴田作治郎の四人である。

函館に帰った益谷さんは、自分の将来の方向を見出すために昭和二十一年から二十九年まで八年間、雨の日も雪の日も、毎朝、函館の浜辺で祈った。函館の海岸に大森の浜という白砂青松の浜がある。函館の西側は日本海に面する港で新島先生が脱出したのはそこであるが、大森の浜は東側にあり太平洋に面し、彼方にトラピストの塔が見える美しいところである。石川啄木が

東海の小島の磯の白砂に

われなきぬれてかにとたわむる

とうたったのもこの大森の浜である。益谷さんはこの浜辺で毎朝自分の生涯を何のために用うべきかを求めて八年間祈りつづけた。

この間、益谷さんは十五くらいの仕事を経験した。古衣屋、古本屋、アイスクャンデー屋、パン屋、スルメ加工、材木監視、雑貨行商、協同組合、ピーナツバター、綿布販売等々を教えた。中には春秋社という競馬の予想

屋をやったこともあった。彼はその社長兼小使で馬の素質から対戦成績をくわしくしらべ前日の四時にガリを切り、五時には刷りおえて、自転車の上ろに社報をつんで函館市内のタバコ屋に配布して五十円で売りさばくという仕事であった。

当時、益谷さんは商売をして家計を支え、教会においても熱心な信徒として二千元の月定献金をしていた。神学校にいつて伝道者となる決心を語ると白川鄭二牧師（同神昭一六年卒）は、「あなたは信徒としてすでに有力な働きをしているので、こと更牧師になる必要もない」といわれ、あまり賛成を得られなかったが、たまたま同牧師が留学中、留守番役をしていた加藤和正伝道師（同神昭二五年卒）にすすめられ、昭和二十九年四月同志社大学神学部入門をくぐった。その年の十二月父はこつぜんとして世を去り、翌三十年三月には母も相ついでなくなられた。「もう一年入学を延ばしていたら恐らく自分は神学校に入っていなかったと思う」と益谷さんは当時を述懐して語っている。人は何事をなすにもその時があるものである。

5

昭和三十二年の十二月「マルチン・ルターの神秘主義」というテーマの下に修士論文を書きあげ提出した、クリスマス・イーブの夜神戸岡本教会の中村敏夫牧師（同神昭九年卒）の家で益谷さんはお見合をした。相手は、関西学校の神学部を卒業し、研究室に残って旧約神学部門の助手をしていた松浦正子さんであった。しばらくのほほえましい歓談のち畳に手をついて別れの挨拶を交したとき、お互いのおデコがゴッソとぶつかった。これが本当の出合いであった。二人は卒業と同時に結ばれて西成の社会館に赴任した。

桃栗三年柿八年とはよく言ったものである。西成で益谷さんが働きをはじめてからちようど八年になる。西成の柿の木はさらに成長してゆくにちがいない。部落の解放と人間の回復のために地域の人々と共に益谷さんは遅い働きを続けてゆくにちがいない。

（神学部長・基督教倫理学）

同志社時報 第18号

評 論	90周年は踏切板である……………住 谷 悦 治
	90年の激流……………秦 孝 治 郎
	私と京都……………奥 田 東
メッセー	言葉の花東……………海外諸大学学長
	同志社 100 年にのぞむ……………校 友・教 職 員
詩	あけくれ……………河 野 仁 昭

人物誌・新刊紹介・学内消息

一部 100 円 年 6 回発行